

### 3 男子グループ

今日はいつもの向かいのホームへ降りた。いつもの通勤鞆ではなく、一輪の薔薇を持って。

彼女に気がついたのは、数週間前だった。綺麗な人だなあと見とれていた時、目が合ってしまった。思わず目をそらした私に彼女はほほえみを返した。それからだ、毎朝彼女と視線だけで会話するようになったのは。

「今日も人が多いですね」と苦笑いを向ける。

彼女は「そうですね」とうなづく。

そんなことを続けていたある日、気付いた。私は彼女に恋をしていたのだ。

彼女を食事に誘おう。

彼女に薔薇をさしだし、告げようとした。

「すみません、メンテはいりまーす」

後ろから声をかけられた。

そこには作業服の男たちが。

男はおもむろに彼女に手をのばし、彼女の顔を「はずした」。

了

#### 本作のプロット

「いつも駅のホームにいる彼女に僕は恋してしまったようだ。」

毎朝電車に乗って通勤している僕は、毎朝駅のホームにいる彼女に気付く。時間も電車の車両も同じ。僕は、彼女にいつのまにか恋をしてしまう。目だけで挨拶を交わす朝が4ヶ月続いたある日のこと、僕はついに決心して、彼女に告白する。しかし、彼女は僕に言う、「私はアンドロイドです。ごめんなさい。」と。僕は失恋する。

## 冒頭部のエピソード

A 昨日買った五千円分の薔薇の花束を持って、私はいつもの通勤電車に乗り込んだ。

彼女は今日もあのドア付近にいるはずなのだ。いつも、乗降に用いるのと逆の側のドアにもたれかかって、少しうつむいてイヤホンで音楽を聴いている彼女が。

彼女の存在に初めて気がついたのは三カ月前のことだった。一目ボレだった。

B 私はバラを持って電車に乗った。潰れないように大事に抱える。

人々は「何かお祝い事でもあるのか」という目で私を見ていたが、そんなことを気にする余裕もなかった。

会いたいのだ。とにかく。

私は今日こそ伝えると誓ったのだから。

あの美しき「彼女」に。

やがていつもの彼女がいる元へたどりついた。

C 二週間前からだ、彼女と目が合うようになったのは。

最初はホームの向こうの彼女のことをキレイな人だなど思い、横目で見ていた。

私は恋をしていた。

何年ぶりだろう？ こんなにも心惹かれるようになったのは。いい大人なのに。

ほんの数分間だが、目と目が合い、

D あいつは俺のものになるか。

毎朝の電車に香る甘美な香水の匂いは、俺の体の奥に息をひそめている欲望を活性化させる。

おかげで、会社での仕事もはかどる。

E 僕はラッシュの中で君への真っ赤な想いを抱いている。

胸に抱いた薔薇に君の微笑みを想い浮かべた。

F スーツ・バラ・ホーム。

ここまでアンバランスな組み合わせはない。

腕の中のバラは、私の気持ちの色、赤。